

開き場に上りたれど、一人の聴衆なく、時を経て僅に四人を得たるのみ。されど、先生諱をとして講じ終に巻を終へて止みたり。

又この時より、天徳寺の二室を借りて、講習會を開く、岡鹿門石川鴻齋なども來れり。先生の意は私に義勇兵を組織せんとするなり、されど志遂に成らず。

予が同門の人にも亦頗る異采の人ありたり、川上行義(静岡の人)小原八十吉などの如きは其尤もなるもの、川上は、後、熊本鎮臺に赴任したるが、一年にして脱營して郷に販り、父の仇敵某を及殺じて、十年の懲役に服したりけるが、滿期ならんとして牢死せり。而して予は、十二年十月に教導團を卒へて、大坂鎮臺に佐長となり、姫路に赴任したり。後、曹長に進み、滿期の時は、士官適任の證を得たり。一度郷に販り、又上京して山岡鉄舟先生が道場に入りて、今の正傳無刀流を學びたり。予は、是より關東武者修行の項に移らん、蓋し予が一生の歴史につきて、最重要にまで而して最多趣あるものなるべし。

(未完)

人類學の辯

海 南 生

何人も其名を聞て多少其物を推測するを常とす。思ふに諸君のうち未だ人類學に關する書物を繕かざる人もあらん。されども人類學は何かど云ふ疑問に對して、如何で答へざる人は稀なる可し。例へば人類學は史學の一部分なり、人類學は英語の Anthropology に外ならず、人類學は古物を研究するものなりなど云ふが如し。此種の推測は幾分の眞實を合ひ可きも、往々誤謬に陥れるは甚だ遺憾なり。

かゝる推測の誤謬を咎むるは無理とや云ふ可き。諸學に通じて人類學の智識をも有すと認められたる人さへ、屢々其説に誤謬の存するを見る。例へば人類學にては人類進化の時代を石器時代青銅時代鉄時代に區別すとか、人類學と考古學は全一なりとか、人類學は史學の補助學科にては實用の學にあらずと云ふ類是なり。殊に近來坊間販賣せる少年雜誌や雜駁なる事を記せる雜誌等によりて、僅かに人類學の一端を窺ひ、妄なる臆測をなし、兎や角論するものゝ説に至りては、其誤謬一々指摘するに堪えず。今左に辯明する所は、唯世間に流布せる誤謬中人類學全体に涉れる者二三を擧ぐるのみ。其詳細は暫く之を人類學の書籍に譲り、此には誤謬の例を指示するに過ぎず。若し諸君が本編によりて此學に對し多少の注意を起す事あらば余の幸之に過ぐるものなからんとす。

(一) Anthropology と所謂人類學とは全一にあらず。現今日本にて人類學と云へば一般に英語のアンソロポロヂーに當る事勿論なり。然れども英語のアンソロポロヂーは、日本にて人類學を通例人類一般に關する研究を司る理學なりと云ふが如く、唯一の意味を有する語にあらず。抑も人類學は最新學科の一なれども其源流は遠く上古に存するものなり。蓋今を去る二千二百餘年前 Aristotle は動物書を著し、人間は猿に近き動物なりと記せり。其後四百餘年にして Cains Plinius Secundus は其著 *Historia Naturalis* にて、人類心身に關する諸事を記せり。爾後千六百餘年を経て Linnaeus は *Systema Naturae* と Buffon は *Histoire Naturelle* と Oliver Gold Smith は *History of the Earth, and animated Nature* を著し、各人類を動物の一なりとまで論じたり。此等の諸氏皆理學的方法を人類の研究に應用せしも、未だその研究の結果を以て特に一書を著はす事なかりき。従て自己の研究を公にするに止まり、研究の方法を示せるものにあらざるなり。而して其初めて人類の研究に重き

を置き、其結果を一書に編し、研究の方法を示せしものは Johann Friedrich Blumenbach の人類變遷論なり。氏と前後して John Hunter や Prichard 等輩出し、人類の理學的的研究漸く精密を加ふるに至れり。要するに人類學をして一の學問たらしめ、アンソロポロヂイといふ語に、今日我國にいふが如き人類の研究一般を總稱する意味を興へたるは、ブルームバツハの功なり。此の如くアンソロポロヂイといふ語に所謂人類學の意味を附與せしは今を去る百余年前の事なるが、其前後此語は何に使用せられたるか。坪井理科大學教授は曰く、Hundt は解剖書に Anthropologium の名を用ひ、Goleazzo Copella は人性論に U'Anthropologia を命じ、Kant の心理學上の著述に Anthropologie あり、James Gall はアンゼン及びサマソの事を含める著述に Anthropology of Bible、Nischalo 夫人は解剖生理衛生等に關する著述に Esoteric Anthropology の名稱を興へ、Barley は体格の事を論せる Topinard の著述を Anthropology と譯し、Rebrunn は解剖書を Anthropology と名けたりと。此を以て之を見ればアンソロポロヂイなる名稱は、必ずしも所謂人類學と云ふ學問と一致せざる明かなり。故に若し其意味の差異に注意せずんば、外國語反譯に混乱を來たすべきは勿論不測の錯誤を生ずべし、我邦にては人類學といふ語の意義は確定せるが如くなれども、中々油斷の出來ぬ話あり某氏曾て新聞紙上にて某氏譯述人類學一班と云ふ廣告を見て、其人類學とは現に理科大學に講座の設けある人類學の事なるべしと思ひ、之を購求せしに、全く豫想の外に出で神學の事を論じたるものなりしとぞ。是れ素よりアンソロポロヂイと云ふ語の意義の定まらざるに由るといへども、譯述者の無識より起りたる者といはざる可らず。

(二) 人類學は寧ろ動物學に屬す、世には人類學を史學の一部なりと、思へる人多きが如し。當今日

本の人類學者と目せらるゝ人々のなせる事を見れば、無理ならぬ言とも見ゆ。されども仔細に考ふれば、物の本体と其物に達する順序とを混同せる者にあらざるか。成程今の人類學特志家の事業は、事實を蒐集し之を整理し又は比較研究するに過ぎず、其目的は單に史學に隸屬して之に材料を給するにあるが如し。然りとはいへども此等は人類學研究の順序なるを思はざる可らず。研究の順序と人類學其者とを混同して人類學の結果の如何を考へざるもの、豈誤謬にあらざるや。今更に之を詳説せん。人類學に關する書物を一讀せし人は、必ず人類學に三大部分ある事を知らん。

第一 人類本質論 Biological Anthropology 人類とは何物なるかを論ず。

第二 人類現狀論 Descriptive Anthropology 人類は如何なる有様にて存在するかを論ず。

第三 人類由來論 Historical Anthropology 人類の今日あるに至りたる所以を論ず。

即ち其本質論にては、人類の身体上心理上の諸性質を説明するは勿論、之を哺乳動物に屬する靈長類の第九科に置き、第八科なる類人猿との異同を論じ、其種の單一なるや否やを究め、世界に於ける地位如何を決定すべく。現狀論にては、諸地方人類の性質を知り、其地理的分布を明にし、各種の標準に依りて之を分類し、其分類法は系圖的分類を用ふべき所以を論定すべし。而して由來論にては、人類は一祖なるか多祖なるか、多源なるか一源なるかを究め、其祖先の形質を知り、初めて地球上に顯はれし年代及び場處を明にし、身体上心理上土俗上に異同を生したる所以を稽查すべし。要するに人類學は人類に關する凡ての問題を解釋するものにして、彼の遺跡を探り遺物を考ふるか如きは研究の手段に外ならず。殊に人類學にては本質論現狀論由來論の何れたるを問はず、人類を動物の一種として説明せ、其動物的の形質及び組織を研究の基本となすものなり。而して其史學に關する所は由來

論の一部分に過ぎず。此に由て之を見れば人類學は寧ろ動物學に屬すべき者にして、史學の一部分となす事の不當なるや明かなり。是れ帝國大學にて人類學を理科大學の動物學科に附屬せしめたる所以なるべし。

(三) 所謂石器時代青銅時代鉄時代は、人類學上人類發達の順序を示すものにあらず。世人は人類學にては石器時代青銅時代鉄時代を以て、人類開化の順序を示すと思へるが如し。唯に人類學の門戸を窺はざる人のみならず、多少史學者古學の智識ある人にも往々此の如き誤謬あるを見る。所謂石器時代とは Stone-age の意譯にして、丁抹瑞典の學者 Nilson, Steensrup, Forchhammer, Thomsen, Worsaae 等の考定せしものなれども、青銅時代鉄時代の二語は曾て希臘人の用ひし所なり。先頃大學にて編纂せし「日本石器時代人民遺物發見地名表」の卷首にもあるが如く、昔希臘人の説に人類墮落の事あり。其説に曰く、人間は極樂世界なる金時代より銀時代青銅時代英雄時代を経て鉄時代に達せりと。其後「Troy」は金時代鉄時代の語を用ひ、Hercules は金時代銅時代鉄時代の事を云ひし事あれども、根元は希臘人にありとす。而して歐羅巴の古器物の原料に鉄と青銅の別ある事、及び鉄器の盛に行はるゝ前に青銅器の盛に行はれたる時代のありし事は古來人の知る處なりしが、今を去る六十余年前、北部歐羅巴にて上古青銅器に先ちて石器の盛に行はれたる時期のありし事を發見し、前記の諸氏は之に石時代の名稱を與へたり。かくて世に石時代青銅時代鉄時代の名稱を慣用するに至れり。約言すれば現今にては石時代青銅時代鉄時代共に器物の原料を示す事勿論なれども、元來青銅鐵の語は希臘人等の貴賤美醜を示す形容詞たりし者なり。三時代の成立此の如き、其學理上信據すべからざる事殆んど疑を容れざるなり。猶之を實例に徴せんか、實際三時代の人類發達の前後を示す處は、唯瑞西

の湖底と丁抹の泥炭層のみ、其他の國には三時代を順次に經過せるもの殆ど稀にして、或は他金屬を使用せし處さへあるなり、彼の埃及人は石器の次に青銅器鐵器を併用し、巴比倫人は古昔より赤銅及び鉄を知り、墨其古秘魯の人民は石器の次に赤銅器を用ひ、亞弗利加の土蕃は大概石器より直に鉄器に移り、日本支那朝鮮の如きも石器時代より銅鉄混用時代に移れり。之を要するに三時代の區別は東西の Habitations Lacustres 及び丁抹の Shellmound に據りて成立せるものにして、之を以て一般人類の發達を律せんとするは背理の甚だしきものなり。

(四) 人類學は考古學よりも範圍廣し。人類學と考古學と全一に視るが如き人に、人類學の範圍は考古學よりも大なりと云ふとも、俄に首肯せざる可し。然れども前の(二)を讀みし人は、考古學は人類由來論の部分たる事を知る可き筈なり。今一層此問題を詳にし且つ人類學を古生物學社會學土俗學博言學人類學史學等との關係を知らざる人のために、少しく辯明すべし。蓋し人類學の研究は地質時代第三紀 Tertiary System より今日迄、數十萬年間に亘るものなり。

人類の地球上に表はれし年代に付ては、諸説異同ありて未だ確定するに至らず。今最近の東京人類學會雜誌の記事を以て之を示さん。今日迄の調査にて、人骨の最も古きものは伊太利より出て、第三紀の最新 Pliocene に屬する地層中にありたり。又佛蘭西にては、第三紀の中新世 Miocene の地層中より人類の使用せし石器を得たり。されば當時已に人類の地上に生活せし事明なり。而して其年代を考ふるに、大氷原の跟跡其地層上に位せる故、大氷原の年代を考定すれば人類初生の年代を略ぼ概算するを得べし。さて天文學によりて、北半球に大氷原の起る可き時代、即ち地軸の變化と軌道の變化と相合して北半球に暑くして短き夏と、寒くして長き冬とを起すべき年限を求むれば、

凡そ二十一萬年前なりといへば、其地層の下に位せる地層に属せる人類は、少くとも二十五萬年位前に地上に出でしものと想像する事を得べし。

人類は此間に漸々發育變遷せしものなれば、其進歩の時代を分割する能はざる事勿論なれども、便宜のため之を區分えて研究する人少なからず。考古學家寺石正路氏の如きは其研究を四期に區別せり。即ち

第一 化石時代 The period of the fossilman 人類の始めて動物より進化せる時代にして、其研究は主として地質學古生物學に亘る。

第二 原人時代 The period of the primitiveman 人類原始の生活并に進歩を考ふる時代にして、其研究は主として社會學土俗學に亘る。

第三 史前時代 The prehistoric period 人類已に多少の開化を有すれども未だ文字なき時代にして、其研究は主として考古學博言學人種學に属す。

氏は猶史前時代を區別して石器時代 The stone age 金屬時代 The metallic age となし、金屬時代を更に青銅器時代 The bronze-age (附、赤銅器時代 The Copper-age) 及鐵器時代 The iron-age に分てり。

第四 有史時代 The historical period 全く文字出來の時代にきて、其研究は主として史學に属す。是れなり。要するに此等諸般の學問を湊合して人類一時の變遷并に其圍外の關係を調査し、人類の發達に付ては自ら一定不動の法則あるを示すものは人類由來論にして、考古學は實に其内に包括せらるゝものなり。猶左の表を參考せよ。

Archaean Group		Palaeozoic Group		Mesozoic Group		Geology							
						Cainozoic Group							
						Tertiary System			Quaternary System				
						Pleocene	Oligocene	Miocene	Pliocene	Diuvial Series (Ice-age)	Aluvial Series		
						Palaeontology							
						Historical Anthropology							
						Fossil Period		Primitive Period		Prehistoric Period		Historical Period	
						Sociology & Ethnography							
						Archaeology, Philology & Ethnology							
						History							

以上記す所之を一括せば、遺物遺跡を探求するが如きは研究の手段に過ぎずして、人類學の本体は人類に關する凡ての問題を解釋する人生須要の學科なりと云ふに歸す。然るに當今の學者は動もすれば、自己の專攻する學科を尊び其範圍を廣くし其功用を誇る弊あり。今此編を見てかゝる弊に陥れるものにあらずやと疑ふ人もあらん。されども余は人類學を專攻するものにあらず、唯許多の誤謬に陥らざるだけの智識を有するのみ、故に世の専門家の如き我田引水の説あるべき筈なま。若し多少失當の事あるあらば是れ余の淺識の致す處なり、(諸君幸に買かふ事勿れ。)而して爾來我校には此學に精しき武藤先生ありまが、今や又各地の人類學會に有名なる須藤先生を迎ふるに至れり、諸君若し人類學に付て深く知らんと欲せば両先生に示教を請へ。